

南総里見八犬伝、伏姫（ふせひめ）のモデル種姫

2020年10月27日

我部山 民樹

1、まえがき

2019年10月2日、いちほら市民大学講座の一環で、富士山宝林寺にて、御住職の千葉公慈様による講話を受けました。「いちほら観光大使」をされていますが、東北福祉大学学長の職にあり、雑誌、テレビ、講演会で仏教の教えと生き方を説いておられます。テレビ番組の「ぶっちゃけ寺」でもおなじみの方です。

座禅に続き「市原市ゆかりの姫ふたり～種姫（ふさひめ）と鶴姫（つるひめ）の物語～」の講話がありました。講話の後、種姫（1542～1589年）のお墓と種姫が愛犬と過ごした洞窟に案内して頂きました。講話の最後に「種姫がいたから、南総里見八犬伝がうまれた。鶴姫がいたから、新井白石の‘正徳の治’の活躍があったともいえる。言い換えると、種姫がいなければ、南総里見八犬伝も無かった。鶴姫がいなければ、白石の活躍も無かった」というような話を思い出した、

「あれはどのようなことだったのだろうか？」と思い、調べようとしたら、どうしたことかメモを取っていないのです。講話の時に頂いたA4、2ページの資料を基に調べてみました。



宝林寺の本堂



種姫のお墓

鶴姫の物語は江戸時代、久留里城第3代当主・土屋頼直にまつわる話ですが、ここでは種姫の話に絞ります。

種姫は里見家第6代当主・義堯（よしとか）の娘で「南総里見八犬伝」（1814年に刊行開始、28年後に完結）のヒロイン伏姫（ふせひめ）のモデルとされています。種姫の信心深さや山に籠った（宝林寺の裏山の洞窟で愛犬とともに暮らしながら、亡夫の霊を弔った）という史実から曲亭馬琴（滝沢馬琴）が着想を得て、「南総里見八犬伝」が生まれたとされています。日本史上最大の長編小説です。

2. 主な出来事



1542 年	種姫誕生
1560 年	北条氏康が久留里城に侵攻して来たが、種姫の父・里見義堯は籠城し、上杉の援軍を得て勝利した。
1564 年	種姫の夫・正木信茂、北条軍との甲府台合戦で死去、 種姫、宝林寺創建
1589 年	種姫死去
1590 年	信茂の従兄弟・正木頼忠の勝浦城落城、「お万の方」逃げ延びる
1593 年	「お万の方」が家康の側室になる
1814 年	南総里見八犬伝の刊行開始

3. 位置図



復元された城



←久留里城

館山城→



4. 南総里見八犬伝のあらすじ

物語の主題は、「勸善懲悪・因果応報」にあります。悲劇の最後を遂げた里見氏をはじめ安房地方の善良なる人々などをとりあげて、馬琴の意のままに大活躍させる爽快な小説になっています。

物語は、結城の戦いに敗れた若武者里見義実（よしざね）が、安房へ落ち延びる場面から始まります。

やがて安房滝田の城主になった義実は、隣国の館山城主安西景連（かげつら）の攻撃にあった。愛犬八房の働きによって敵将景連は討ち取ったものの、その功績で八房は伏姫（ふせひめ）を連れて富山（小説では‘とやま’、モデルの山の名は‘とみさん’）の洞窟にこもった。姫を取り戻しに来た許嫁の金碗大輔（かなまりだいすけ）は鉄砲で八房を撃ち殺すが、伏姫にも傷を負わせてしまう。八房の気を感じて懐妊してしまっていた伏姫は、身の潔白を証するため、大輔と父義実が見守るなか、自害してしまった。

このとき、伏姫が幼い時に役の行者（えんのぎょうじゃ）から授かった八つの玉が八方へ飛んで、仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の霊玉を持つ八犬士が

登場してくることになる。

こののち、金碗大輔は出家して、「**大法師**」（ちゅだいほうし）となり、飛び散った八つの玉の行方を求めて旅に出る。伏姫の子供ともいえる八犬士たちは、それぞれ思いがけないところで出会い、華々しく活躍する。

八犬士たちと巡り会った「**大法師**」こと金碗大輔は、二十数年ぶりに八犬士を里見義実のもとへ連れ帰った。里見家の家臣として里見家の危難を救った八犬士は、義実の八人の孫娘をそれぞれ娶る。その後、子供たちに家督を譲ってからは、富山の山中へ姿を隠して仙人になったというお話。

「**大**」という名は、「犬」の字を割った事に由来する。
なぜ「**大**」で「ちゅ」と読むのかは、不明…。



注記；富山（とみさん）

房総丘陵にある山のひとつで標高 349m。

「とみさん伏姫ハイキングコース」があり、驚くことに「伏姫籠穴（ろうけつ）」があり、「里見八犬士終焉の地」の柱が立っている。

‘滝沢馬琴もびっくり！’



5. ヒロイン「伏姫」のモデル「種姫」について

種姫は房総半島を支配していた里見家6代藩主・里見義堯（さとみよしたか）の長女である。当時、上総久留里城に居を構えていた。

(1) 小説登場人物のモデル

（史実）

里見義弘

義弘側室で梅王丸の母

（小説）

里見義実

怨霊 玉梓

梅王丸
種姫

愛犬 八房
伏姫

(2) 里見家系譜

初代義実→2代成義→3代義通→5代義豊



4代実堯→6代義堯 →7代義弘→梅王丸(義頼に、出家させられる)



・種姫

・政姫(義頼により琵琶首館に幽閉

され、のちに変死する。)

・8代義頼→9代義康→10代忠義

・豊姫(鹿島大神宮 入社)

別の話だが、「逃避行で初恋を実らせた里見義弘と足利義明の娘・青岳尼(しょうがくに)」の物語がある。青岳尼は鎌倉五山筆頭の太平寺の住持となり、関東一円の尼僧を統括する立場にあったが、それを投げ捨てて佐貫城の義弘のもとに走り、還俗して義弘の正室「お弓の方」になった。

(3) 種姫の略歴

安房正木家当主時茂の嫡子信茂に嫁ぐ。1564年1月、里見家が北条氏と戦った甲府台(現市川市)の闘いで夫を亡くし、25歳で未亡人となる。

1564年8月、上総朝生原(市原市)で富士山宝林寺を創建すると、尼となり亡夫の霊を弔いながら「裏山にある洞窟に住み、愛犬と共に生涯を過ごす。」とお寺の記録等に伝えられている。

亡夫の霊を弔った後に、安房国白浜に滝本山種林寺を建立し、そこに居していた。(今はその面影も無くなっている。)晩年、宝林寺に移りここで死亡している。

(4) 正木家

①系図

三浦半島の三浦一族(頼朝の重臣)の庶流(分家)と言われている。

1247年、御家人三浦一族は北条に滅ぼされた。

傍流の三浦守時が相模三浦氏を興し、子孫の三浦義同の代、1516年に北条に攻められ、相模三浦一族は滅亡。義同の子が安房で正木通綱と名乗る。(弟の時綱説、別の三浦氏の庶流出身の説もある。)

○安房正木家

(三浦義同(よしあつ))



正木通綱→大多喜城主時茂→**信茂(種姫の夫)**

(別名時綱)

(時茂の孫たちが岡山藩の家臣になる。)

○勝浦正木家



勝浦城主時忠→頼忠→**お万の方(家康の側室)**

後に頼忠は剃髪し、日正と号す。長男直連が松平忠吉（家康の4男）の家臣。
次男為春は紀州徳川家の万石陪臣（大名並みの俸禄）となる。

因みに三浦一族を纏めると

○御家人三浦一族

1247 年

三浦一族嫡流は権力を持ち、北条氏をしのぐほどになっていたため、北条氏に攻め滅ぼされる。(宝治合戦)

○相模三浦家

1516 年

傍流の三浦盛時が三浦氏を再興していたが、この年に子孫の三浦義同が北条氏に攻められ、新井城が落城し、義同（動寸）は家臣もろとも討ち死にし、滅亡。

種姫の嫁ぎ先は安房正木家である。正木家は三浦一族（頼朝の重臣）の庶流（分家）といわれ、里見家の重臣だった。小多喜（後に大多喜）城主・正木時茂の弟の正木時忠が勝浦城主となる。1590 年、後北条が秀吉に滅ぼされた後、正木時忠の五男・頼忠の勝浦城は家康の派遣軍により落城する。落城寸前に、頼忠の娘お万は城から逃れ、後に縁あって家康の側室となり「お万の方(養寿院)」と呼ばれるようになる。紀州徳川家の家祖「頼宣」と水戸徳川の家祖「頼房」の生母である。

6. 最後に

御住職の講話の「種姫がいたから南総里見八犬伝が生まれた。いなければ生まれなかったかも知れない」との話は合点がいました。」

ついでの話、千葉公慈御住職は休日にはお寺におられますが、平日は（大学にいますので）御不在です。平日に宝林寺を訪問し、御住職のお母様に地元の祭事についてお話を伺ったことがありました。その時、御住職の講演会についてお伺いしたら、「お陰様で3年くらい先まで埋まっていると聞



千葉県勝浦市八幡岬公園（勝浦城跡）にある養珠院像

いています。」と返ってきました。随分と御多忙の
ようです。

以上